

問い続け、学び続ける子どもたち

CONTENTS

- 校長挨拶…P.1
- 本校の研究について…P.2
- 教科・領域部紹介…P.3～P.6

「問い続け、学び続ける子どもたち」を育てるために
～「子どもの言葉でつくる授業」という視点の実践的意味とは～

和歌山大学教育学部附属小学校長 船越 勝



新しく97人の1年生を迎え、附属小学校でも今年度の新しい実践がスタートしました。新学期は、子どもたちが1年間の中で最も自らとその学びに希望と期待を抱くときです。「自分はこのことを追究したい」「今年こそこのことにチャレンジするぞ!!」「学びに取り組む自分のことを認めてほしい」など、一人ひとりの子どもは、自らの学びの「物語」をもっています。私たちは、こうした子どもたちの「声」に耳を傾けながら、彼ら・彼女らの「物語」を丁寧にみとり、子どもたちの希望と期待を実現する学びの実践をともに創り出していきたいと考えています。

さて、附属小学校では、昨年度から「問い続け、学び続ける子どもたち」を研究主題に掲げ、授業研究をスタートさせています。その意味するところは、子どもたちは、一人ひとり自らの切実な「問い」をもっている存在であり、それを仲間とのかかわり合いで深め合い、連続的・波状的に発展させる中で、ものごとの本質へ向かっていく学びを創造していきたいというものです。そして、今年度は、さらに「子どもの言葉でつくる授業」を副題に設定しました。その含意は、どういった点にあるのでしょうか。

子どもの言葉に着目することは、第一に、子どもたちが自らの言葉で仲間とコミュニケーションを図り、自主的に授業と学びを紡ぎ出していく主体であることを改めて確認するという意味があります。授業の過程では、私たち教師が子どもの言葉を拾い、それを丁寧にみとりながら、その言葉を仲間につなぎ、吟味し合ったりして、授業をつくっていくこともあります。しかし、私たちが最終的にめざすのは、子どもの言葉から出発する学びのプロセスを、子どもたちが自らの力でデザインする授業なのです。アクティブラーニングという課題が提起されている今日、それを教師の技法としてだけでなく、子どもたちが自らの言葉で授業をつくる主体としてとらえる視点が何よりも大切です。

第二に、「文は人なり」といわれるように、子どもの言葉には、その子どもの「今」がリアルに反映されており、だからこそ、一人ひとりの言葉は私たち教師が全力をあげてその意味するところの内実をみとる対象だということです。言葉を通して、その子どもにどこまで迫れているかが問われているのです。そのように考えると、子どもの言葉には、すべて必然性があり、一つも無駄な言葉はないということを心しておかねばなりません。

第三は、その子どもにしか語れない「自前の言葉」を紡ぎ出していくという課題です。一人ひとりの子どもは、自分の言葉で思考し、自分の言葉でそれを表現しますが、その際、仲間とは違う自分だけの思考や認識の内実を、使い古された言葉ではなく、たとえ拙くても何とか落とし込むことができる「自前の言葉」を探し出し、吟味し、選択することができる言語センスを育てていきたいのです。つまり、そうした自前の「言葉探し」「言葉づくり」につながる学びの実践への挑戦なのです。

第四は、子どもの生活と学びを往還させ、生活から出発し、生活をとりえ直し、生活に還っていく言葉を生み出すことです。学校という空間は、とすれば生活の文脈から切り離された、言い換えれば、子どもの生活実感の伴わない「学校知」が中心になりがちです。だからこそ、一人ひとりの子どもの生活認識や生活意欲がその子どもの言葉を通して授業に持ち込まれ、その言葉と背景にある生活とが仲間と対話・交流されるなかで、子どもが新しい「世界づくり」(内田伸子)に向かっていくような学びの実践を構想することはできないでしょうか。

本校では、こうした子どもの言葉から始まる新しい学びと授業のあり方の探究を、各地の学校の皆様とともに進めることができると考えています。今年度も、後掲のご案内にありますように、様々な公開研究会を予定しています。どうか多くの皆様方の積極的な参加をお願い申し上げます。

本校の研究について

授業研究会のご案内

- ◆複式授業研究会・公開授業研究会：平成28年6月11日（土）
- ◆教育研究発表会2016：平成28年10月29日（土）
- ◆ICT活用授業研究会（近畿放送教育研究大会，近畿学校視聴覚教育研究大会）：平成28年11月25日（金）

<http://www.aes.wakayama-u.ac.jp/kenkyukai/>



研究主任
馬場敦義

★昨年度の研究実践の成果と課題より

昨年度、本校では「問い続け、学び続ける子どもたち」の研究主題のもとで鹿毛雅治先生（慶応義塾大学）の指導をうけ、実践研究を行うことで、成果とともに貴重な課題も得ることができました。成果としては、教師が子どもたちの言葉に着目することで、その関係性や主体性をより具体的にとらえることができることがわかってきていました。また、新たな課題として特に以下の2点が表出することとなりました。

- 1, 子どもたちの主体的な姿が見られた一方、人とかかわりながらの学びが不十分である。
- 2, 教師が子どもの学びの筋で授業をみることができていない。

以上のような点から、今年度は「子どもの言葉」に着目し、子どもの学びの筋を探る授業研究を行っていくことになり、研究主題を

問い続け、学び続ける子どもたち ～子どもの言葉でつくる授業～

と定め、研究を進めています。

★子どもの言葉でつくる授業とは

「子どもの言葉がもとになり授業を展開していきたい。」本校においてもこれまで子どもの言葉を丁寧にとり、適切に支援することで学びを成立させようと取り組んできました。しかし、教師にとって都合のよい発言を取り上げてしまったり、言語表現が上手にできない子どもを見過ごしてしまったりすることもみられました。この点については、鹿毛先生からの「子どもたちの学びの筋では決着がついていないのに、教師の予定で次に進んでいることや、子どもと教師のやりたいことにズレがあるような授業を展開してしまっている。」との指摘がありました。

そこで、今年度は改めて一人一人の子どもの学びを捉え直そうという思いのもと、サブテーマを「子どもの言葉でつくる授業」としています。ここでいう言葉とは、子どもの発言だけを指すものではありません。子どもの発言には、そのもととなる思いや考えが必ずあります。その思いや考えは言葉よりも先に表情や仕草、視線として表出されることも多くあります。本校では、これらすべてを「子どもの言葉」と捉え、子どもの一挙手一投足を大切にしたい授業づくりに取り組もうと考えました。

子どもの言葉でつくる授業を進める上で、子どもの発言が飛び交う授業は必要不可欠です。ここでいう発言は、指名を受けた際の発言だけではなく、課題に出合ったときのつぶやきや友だちの発言に対する反応等も含まれます。このような子どもの発言が溢れるような学級風土をつくるのが「子どもの言葉でつくる授業」の第一歩と考えます。しかし、子どもの発言が飛び交う授業であっても、理想とする問い続け、学び続ける子どもの姿とは言えません。本校がめざすのは、授業の中での言葉を思慮深く考察したり、問い直したりする子どもです。子どもの言葉によって授業がつけられることで、研究主題に迫っていけるのではないかと考えています。

今年度予定している研修会・研究会の案内を上部に掲載しております。ぜひ和歌山大学教育学部附属小学校にお越しください。

参考文献

- [1] 鹿毛雅治, 子どもの姿に学ぶ教師「学ぶ意欲」と「教育的瞬間」, 2007, 教育出版
- [2] 佐藤学・和歌山大学教育学部附属小学校, 質の高い学びを創る, 2009, 東洋館出版社

国語科部 つながりを意識して考える力を育む

国語科では、つながりを意識しながら考える力を育むことを通し、問い続け、学び続ける子どもたちの姿に迫ります。今年度は特に、学習のつながりに焦点を当てます。子どもが「知りたい」「読みたい」「伝えたい」と思えるような学習課題の設定、単元構想を行うことが大切です。

友だちとの対話や教材へ立ち返ることのできる言語活動の設定、子どもが「早く読みたい」「〇〇したい」と思える“ほんまもん”の学習課題の設定、見通しと振り返りを大切にする授業づくりに重点をおいて研究を進めます。



宮脇 準 中村正雄 湯浅明菜 中岡正年

社会科部 よい社会の形成に参画する子ども

～ふるさとを愛する個を育てる学習の工夫～

社会科部の今年度のキーワードは「ふるさと愛」と「社会参画」です。ふるさと和歌山の地域教材を開発し、学びを通して和歌山のことを好きになり、もっと知りたくなり、ふるさと和歌山を想い、動き出すような子どもたちの姿をめざします。そのような姿を具現化していくために、子どもたちが学びを実社会・実生活に生かしていくような単元構成と様々な場面で「問い」が生まれる背景やその質にこだわって実践研究を行います。



中山和幸

梶本久子

算数科部 子どもがつながる算数授業 ～解釈と共有を軸にして～

算数科部の今年度のテーマは、「子どもがつながる算数授業」です。これは、一昨年度まで十数年、算数科部が研究し続けてきたテーマで、改めて問い直そうと考えました。このテーマを実現するための重要な手立てとして「解釈」と「共有」を掲げました。子どもが互いの表現を解釈し合い、解釈したことを共有し合うことで、問い続け、学び続ける子どもたちをめざそうと思います。



川村繁博 吉久寛郎 小谷祐二郎 糸我直人

理科部 追究を楽しむ子どもたち

子どもたちは、説明できない自然事象に出合ったとき、「不思議だなあ」「どうして?」と思います。それは、「わかりたい」「わかった」につながる大切な気持ちです。

不思議なことが解決しても次々と調べたいことが生まれるような教材を研究し、追究する過程を楽しむ子どもを育みます。そのために、自然とつながる「楽しさ」「感動」を大切にした実践や、対象や他者とのつながりを意識した実践を研究します。子どもたちの言葉を大切にした授業の中で、理由や根拠を他者と共有することで学びを深め、対象に対する見方・考え方を科学的なものへと変容させようと考えています。



馬場敦義 久保文人 中西 大

生活科部 五感を通して感じ、 表現することで気付きの質を高める生活科

～realな活動を通して、認識力の土台を育みながら～

生活科部は、子どもが「ひと・もの・ことに進んでかかわること」「五感を通して感じ、多様な表現方法を工夫すること」「自らの気付きを大切に、友だちと気付きを共有すること」をめざして、取り組みます。

子どもが意欲的に real な体験や活動を積み、気付きの質を高め、幼児期から学童期への移行期の発達課題に迫っていきます。



上田 恵 横瀬文子

音楽科部 「つなげる」ことでせまる音楽の魅力

～思いや意図をもって表現できる子どもに～

音楽科部では、子どもたちが質の高い音楽的な力を身に付けていくために「つなげる」をキーワードにして、子どもたちが生き生きする表現及び鑑賞活動を通して、音楽の魅力に迫っていきたいと考えています。

そのため、①教材（楽曲）②仲間（他者）③自己の3つを「つながり」合わせていくことで生涯にわたる音楽的な「自己教育力」の育成を図り、その要件を明らかにし、「思いや意図をもって表現できる子ども」を目指そうと考えています。

さらに今年度は教材研究や学習環境づくり、題材設定などの様々な視点に「仲間（他者）」が「つながる」を強く意識し研究を進めていきます。



内垣美佳 居澤結美

図画工作科部 **かかわりあうことによって生まれる表現**

～「かかわる」から生み出される「つくり出す」喜び～

子どもたちは、形や色のもつ美しさやその組み合わせのよさに気づきながらイメージをふくらませ、造形活動に取り組みます。

何度もつくりかえ、試行錯誤しながら納得のいく表現に近づける過程には、図画工作科で重要な感性の学びがあると考えます。素材や材料、空間や場に全身で挑み、他者がかかわることで生み出されていく子どもたちの多様な造形表現の可能性を探っていきたいと考えています。



中土井亮 西原有香莉

体育科（学校保健）部

体育科 **生き生きと動いて学ぶ附属っ子** ～子どもの言葉による授業づくりによって～

体力の二極化、運動機会の減少などから、体育において「生き生きと動いて学んでほしい」と考え、今回のテーマを設定しました。昨年度の実践において、個やグループの変容の前後には、学習内容と子どもの中に「子どもの言葉」が大きく介在していたため、「子どもの言葉」をもとに授業づくりを進めることが、研究テーマ「生き生きと動いて学ぶ」の実現につながると考えました。

子どもの学びを探る手立てとして、形ある言葉に加え、表情や態度など形のない言葉も注意深く読み取り、授業を行いたいと思います。



森本孝子 内藤克己 渡辺 圭 則藤一起

学校保健

小学校生活6年間で、生涯健康な生活を送るための素地づくりが必要です。一人一人の子どもが、自らすすんで自他の健康安全に着目し、意識して生活を見直し、健康づくりにつながる判断力と意欲、そして実践力を身につけられる取り組みをしていきたいと考えています。

道徳部 **実践意欲と態度を育てる道徳科**

～互いにつながり合う授業～

道徳部では、子どもたちが授業の中でねらいとする道徳的諸価値を自分の問題として捉え、考え、友だちと話し合いをしていくことを通して、自分の考えを変容させたり、深めたりして「よりよい生き方」を再構成することをめざします。自分の考えと友だちの考えが“互いにつながり合う”を大事に、話し合いを進めていきます。また、授業のみに終わるのではなく、学校生活全般において“互いにつながり合う授業”で獲得した道徳的諸価値を自覚し、実践意欲や態度へとつなげていきたいと思ひます。



田中千映

総合部 自己の生き方を更新していく子どもたち

～多様な視点での学び合いを通して～

総合部の今年度のテーマは、自己の生き方を更新していく子どもたちが育つために、どのような單元であるべきかを考えました。單元の中で、子どもたちが「ひと・もの・こと」と出会いながら、仲間と共同的に学び合っていくことを大切にしていきます。子どもが、單元を通して学ぶことが楽しいと実感する授業をめざしていきます。



矢出大介

複式教育部 問いがつながる複式教育

～学び合いの場を生み出すみとりと支援～

複式の学習では、子どもたちが司会や記録を務め、互いの思考をつなぎ、継続した問いや学びをつくることが求められます。

教師の働きかけだけではなく、自分たちで意見を吟味し、問いを深めることが重要となります。学びは、一人で完結するものではなく、集団として生み出されるものです。子どもたち一人一人が、学びの中で互いを必要とし、共に学ぶことに喜びを感じる受容的な関係をつくりたいと考えています。

子どもたち一人一人の問いや考えをみとり、それらが効果的につながる支援をめざしたいと考えています。



宮脇 準 川村繁博 矢出大介

From Editors

16年目を迎えた『LIVE創 REATOR』には、「生き生きと本物を創り出すひと」という意味が込められています。私たちが創り出す本校の取り組みをご紹介します。

次回9月号は、教育研究発表会に向けて各授業のPRを掲載します。ご覧いただき、ぜひ本校の研究会に足を運んでいただけたらと思います。なお、本校の行事・授業・提案・取り組みにつきましては、今まで以上にホームページでの発信を充実したいと思います。『LIVE創 REATOR』やホームページを通して、皆様に本校の研究や実践をお伝えしますので、日々の実践を考える機会にいただければ幸いです。今年度も、どうぞよろしくお願ひします。

編集委員：中西，久保，横瀬，中岡

和歌山大学教育学部附属小学校

〒640-8137 和歌山市吹上 1-4-1

TEL 073-422-6105

FAX 073-436-6470

URL <http://www.aes.wakayama-u.ac.jp>



本校HP



【巻末写真：自然豊かな校庭で活動する子どもたち】